# 村上忠順翁顕彰会報

村上忠順翁顕彰会報　第20号
編集　村上忠順翁顕彰会 事務局
発行　平成21年3月15日

～～～～～～～ 目　次 ～～～～～～～

・忠順と共に社会の混乱を乗り越える…… 2
・幕末の村上忠順
—天誅組を通して考える—…3
・二村山古歌集
村上忠順をめぐる人々
————中野清風…… 4
・平成20年度の顕彰会活動報告 7
・忠順ありがとう大賞…… 7
・村上忠順顕彰会
女性部研修会に参加して…… 7
・記念樹のしだれ梅…… 8

表紙撮影：川村

# 忠順と共に社会の混乱を乗り越える

村上忠順翁顕彰会 会長　近藤光良

平成二十一年は世界的な混乱の年となりました。昨年のアメリカの金融破綻に始まり、瞬く間に世界にその影響が出始めました。自動車燃料の高騰、円高に続き、世界的な自動車不況の波が押し寄せ、私たちの町豊田市も自動車関連企業を頂点とするあらゆる産業分野や市民生活にその影を落としつつあります。

江戸時代末期も大変な混乱の時期でした。徳川幕府が存続するのか、勤皇方が日本を制するのか。一般庶民にはまったく解らず、不安の毎日であったと思います。海の向こうからも、英国やアメリカ、ロシアなどいろんな国が開国を迫り、場合によっては植民地化の可能性さえありました。

こうした混乱の時代にあって、村上忠順はどうしていたのか、刈谷藩のお抱え医者として不安の毎日を送っていたかというと決してそうではありませんでした。彼は、自分の趣味である和歌を通して国内に多くの仲間をつくり、その仲間を通して日本の中枢における激動の状況を把握していました。

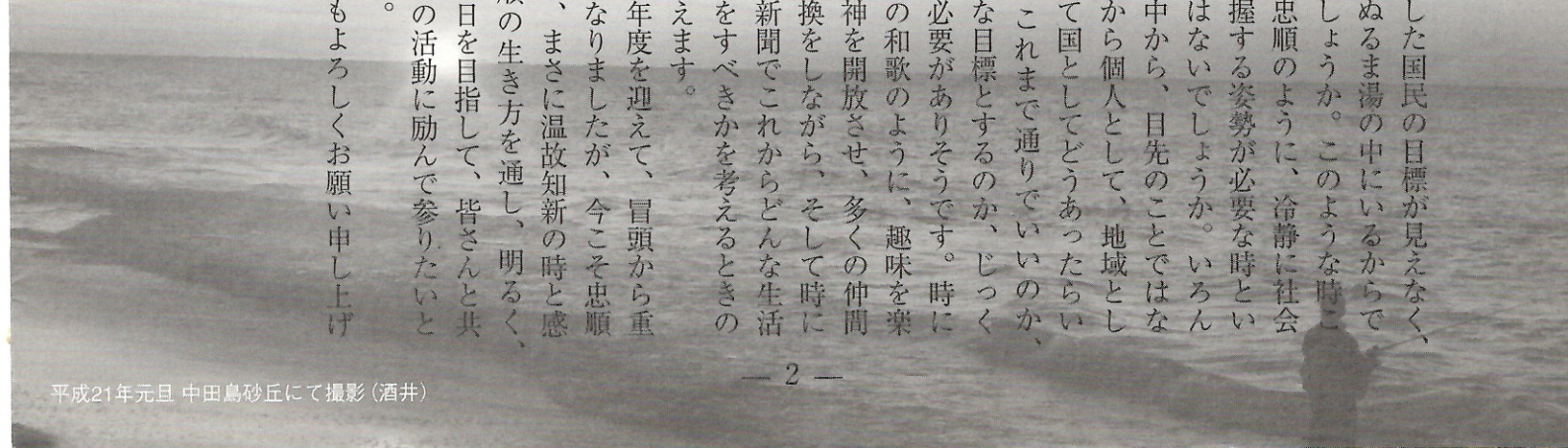
また、国学を通じて、現在の日本の状況や世界の状況を学んでいたはずです。それは、刈谷市の村上文庫に納められた忠順の蔵書を見れば容易に想像できます。当時の最先端の書籍を借りては書き写したり、いろいろ聞いたりした情報をメモとして残しています。しかし、忠順が当時の社会状況や社会のあり方をどのように考えていたのか、幕府体制側にある一人の御典医としては文書に残すことはありませんでした。書けば、自分はもちろん、刈谷藩を危機に陥れることになるためです。忠順は当時の社会状況を書物や仲間の情報から得ることにより、冷静に判断していたようです。その証拠に、討幕運動の最先端「天誅組（てんちゅうぐみ）」に大切な息子を送り込み、また、知人である有栖川宮（ありすがわのみや）親王を総大将とする官軍に、支援をしていたのです。

現在と忠順の活躍した社会状況とは大きく異なります。忠順の時代はまさに新しい日本のあり方をめぐって、日本の国内が激動の時代でした。このときは「新しい日本」という国民のすべてが期待し、目指す大きな目標がありました。そして、明治になり、一挙に西欧文化を採り入れていくことになるのです。この時代には多方面にわたり多くの偉人が輩出しました。混乱の時代と大きな目標が生み出した結果だろうと思います。

さて、今は一国の混乱のみでなく、世界的な混乱に陥っています。幕末時代と異なるのは、「大きな目標」が見えていないことです。特に日本はどうでしょうか。国民全体が目指す目標は何か、戦後の日本には幕末同様、西欧の経済社会に追いつき、追い越せという大きな目標がありました。最近暗い事件が多発するのも、はっきりした国民の目標が見えなく、不安定なぬるま湯の中にいるからではないでしょうか。このような時こそ、村上忠順のように、冷静に社会状況を把握する姿勢が必要な時といえるのではないでしょうか。いろんな情報の中から、目先のことではなく、これから個人として、地域として、そして国としてどうあったらいいのか、これまで通りでいいのか、何を新たな目標とするのか、じっくり考える必要がありそうです。時には、忠順の和歌のように、趣味を楽しみ、精神を開放させ、多くの仲間と情報交換をしながら、そして時には書物や新聞でこれからどんな生活スタイルをすべきかを考えるときのように思えます。

新たな年度を迎えて、冒頭から重い内容となりましたが、今こそ忠順に見習う、まさに温故知新の時と感じ、忠順の生き方を通し、明るく、力強い明日を目指して、皆さんと共に顕彰会の活動に励んで参りたいと思います。

今年度もよろしくお願い申し上げます。



平成21年元旦 中田島砂丘にて撮影（酒井）

# 幕末の村上忠順
## ―天誅組を通して考える―

刈谷市文化財保護審議会長
山田　孝

### 一　はじめに

歌人・国学者としての村上忠順、御典医としての村上忠順については、すでに多くのことが語られている。そこで、私は明らかになっているようで十分明らかにされていない幕末の情勢の中での村上忠順について、天誅組との関わりの中で見てみたい。

### 二　天誅組参加者をかくまった村上忠順

奈良県五條市滝町に建てられた「贈正五位天誅組義士橋本若狭生誕地之碑」に「…九月末東吉野村鷲家口での最後の戦いをかろうじて脱出、その後も勤王の志は何ら衰えず三河の村上忠順宅に潜伏、…」とある。天誅組参加者の橋本若狭が、天誅組の戦い敗北後村上忠順宅に潜伏していたということは、結構知られた事実である。また、戦前に愛知県で出版された書籍のいくつかには、村上忠順やその娘婿の深見篤慶が天誅組参加者をかくまったことが書かれている。特に大正九年に発刊された『碧海郡誌』では北畠治房等が村上忠順邸や深見篤慶邸にかくまわれたことを記している。しかし、こうした記述のもとになる史料はあげられていない。村上忠順や深見篤慶自身が彼等をかくまったことを記すことは、当時の状況からして難しいであろう。したがって『碧海郡誌』などの記述は、明治以後の村上・深見両家の関係者からの話によるものではないかと考えられる。

一方、天誅組参加者自身は記録を残していないか。橋本若狭は元治元年十一月に幕吏に捕縛され、慶応元年六月に処刑されているので、記録を残すことは難しかったと考えられる。ところが、北畠治房（天誅組参加当時の名前は平岡鳩平）が明治三十二年に『橋本若狭小伝　完』という橋本若狭の伝記を残している。その中で北畠は「…当時幕吏の偵察甚た急なるを以て京の志士村上明司が郷里に潜み姑時機を待んと其月廿三日余綱幸とともに三河国碧海郡四馬場村なる村上承卿の許に到る後ち綱幸其姻族新堀村深見篤慶の許に移る…」と書いている。ここで、北畠が綱幸と書いているのは橋本若狭であり、彼は九月二十四日に鷲家口を迂回し、二十九日には京に逃れている。それ以前に京に逃れた北畠と出合い、生野の乱に参加を果たせず、村上忠順邸に来たのが文久三年十月二十三日ということになる。今のところ、これが唯一の関係者の記録である。これを書いた時すでに男爵となっていた北畠にとって、村上忠順邸にかくまわれたことを書くことが、有利になることも不利になることもない。したがって、北畠治房のこの記述は事実であると考えてよい。

さらに、五條市滝町の橋本若狭生誕地の碑の最後に、若狭の辞世の歌として記されている「川上の神の心をこころにて濁れる世にハ澄むとそ思ふ」という歌の短冊が村上家に残されていることも、北畠治房の記述が事実であることを証明しているといえる。

### 三　村上忠順「文久記」の天誅組関係の記録

村上忠順は多くの記録を残している。その中には「座右記」のように御典医としての日記もある。しかし、「天保集」「弘化記」「嘉永記」「嘉永安政記」「文久記」「元治記」「慶応記」などには、村上忠順の情報網によって入手した幕末の多くの情報が記されている。彼は常に社会の動きに気を配り、多くの情報を入手していたことがこれらの記録から分かる。

その中の「文久記」には天誅組に関する多くの情報が記録されている。それらをあげると「彦根藩届書」（九月十五日）、「彦根藩より会津への達書」（九月十六日）、「彦根藩士の話」（九月十七日）、「紀州よりの達書」（九月二十八日）、「召捕え討取りの天誅組浪士」、「和州一乱」（十月七日）、「和州落紙」などである。これらから、追討軍の彦根藩・紀州藩・藤堂藩などの状況や捕らえられた天誅組隊士の氏名から中山忠光が大坂の長州藩邸に逃げ込んだ時の状況まで知ることができる。

これらの記録から、村上忠順は各地の国学者・尊皇攘夷派の人々だけでなく、彦根藩や紀州藩の中枢につながりのある人からも情報を得ていたことが推測できる。

### 四　おわりに

村上忠順は「文久記」にみられるようにかなり広範囲にわたるネット

ワーク網を持っていて、幕末の状況をかなり正確につかんでいたと思われる。また、彼と親交のあった酒井玄悦なども天誅組に資金援助をしていたという伝えもある。こうした状況と二男忠明との関係もあり、天誅組参加者の橋本若狭と北畠治房が村上忠順邸にかくまわれたのであろう。

刈谷中央図書館にて

## 二村山古歌集
## 村上忠順をめぐる人々
## ――中野清風

中澤　伸弘

一、

中野清風は尾張愛知郡の沓掛村の人であり、覚右衛門と称した。文政三年に生まれ、明治六年九月十五日に年五十四で歿したので忠順より年は若いが、ほぼ同時代を生きた人物である。忠順は天保十四年に遠州の石川依平の門に入つたが、清風も忠順の薦めがあつたのであらうか、その翌年の天保十五年に依平の許に入門してゐる。（『歌人石川依平』の門人録による。『名家伝記資料集成』が橘守部門とするのは誤）現在村上家に残る石川依平の書簡の幾つかが、その宛名が忠順と清風の連名で書かれてゐて、その関係がわかるものとなつてゐる。

清風は忠順との関係で、歌人として名を残したと言へる。それは忠順の編んだ『類題玉藻集』初二編には多くの歌が採られ、また忠順の『詠史河藻集』（二首）、同『類題嵯峨野集』、同『千代の古道集』にも採られ、その関係の深さが知られるからである。その他、西田惟恒の『三熊野集』や同『安政六年五百首』以下『文久二年八百首』迄の年々歌集に各一首、また長澤伴雄の『類題和歌鴨川集』四五編、物集高世の『類題春草集』などの幾つかの和歌集に、歌数は多くないが歌を採られてゐる。これらの歌集には忠順も積極的に歌が採られてゐるので、多分忠順の薦めで歌を出したものと思はれる。

二、

清風を語るには、その居住地である沓掛村の近くにある二村山について、その顕彰をした人物であることを忘れてはならないであらう。

二村山は尾張と三河との国境にある山で、そこに昔の鎌倉街道（それは古い時代の東海道）が通り、そのため街道を往来する人に親しまれ、多くの歌に詠まれた歌枕であつた。鎌倉に下った阿仏尼の『十六夜日記』にも

二むら山を越えて行くに山も野もいととほくて日も暮れはてぬ

と、書かれた他『海道記』を初め古来紀行文や和歌に詠まれてゐる地であつた。小山田与清によるその注釈書『十六夜日記残月抄』には二村山について、『和名抄』に「尾張國山田郡両村」、また『延喜兵部式』に「尾張國駅馬・両村各十」とあると説明し、また歌書『能因歌枕』に尾張とあるのを挙げつつ「今は三河國碧海郡に属し沓掛とよぶ所也　詞花ノ秋ノ詞書に三河のくに二村山とみえ」と記し、八雲御抄以下の諸書が二村山を三河の歌枕としてゐるとし、歌として詠んだものは兼盛集、重之集などを「ふるしとす」と書いてゐる。

二村山は尾張と三河の国境の山なので両国の何れでもよいのだが、佐野知堯編の『三河二葉松』（元文五年跋）などが

或書に尾張にしるす　三河は誤なりと云　尤三河と尾張とのやまなればさも有べし

として両国のいづれでも良いとしてゐる。そこには後撰集の歌のほか二十六首の和歌と二句の俳諧とを載せてゐる。同様に忠順の『名所栞』には二村山をこの三河の地の他に近江と、また丹波多記郡二村との三箇所を載せ

両村山　尾張山田郡両村　和名抄

と記して、『詞花集』の能元の「武蔵國よりのぼりけるに三河の國二村山のもみぢをみて」と題するの歌のほかに種々の歌集から二村山の歌を挙げてゐる。興味深いのはさきの『三河二葉松』で三河として扱はれてゐた、正家、匡房の和歌を丹波の歌としてゐることである。忠順はそれなりの考証があつてのことであらう。

三、

清風はこの二村山の絵を尾張の画家である小田切春江に描かせ、それを版にして「尾張國二村山真景」と題して配布した。村上家に残るその一枚刷りは正面に鎌倉古道の通る二村山を描き、右下に沓掛村の家並み、左上には遙か尾張の海を望む景を描いたものであり、「可月堂清風蔵版」と清風が版元として配布したものであつた。小田切春江は森高雅門の尾張の画家であり（明治二十一年十月歿　七十九才）、版画の刀を執つて彫つたのは玉芳堂大助と名が載る。またこれと同時に古歌に詠まれた二村山の歌を集めて冊子とし、『二村山古歌集』（尾張國二村山麓沓掛里可月堂清風蔵版）として世に出した。私の手元にある、その跋文に清風は

此集は今度此山のかたをうつして板にゑらせむとするにつきて俄にものしたれば　もれたるも　おほかるべし　また此頃の人々のことの葉はおひつきてゑらすべくなむ

中野清風

と記してゐる。これによれば一枚刷りはこの『二村山古歌集』と組になつて配布されたやうである。こちらは口絵に先の小田切の師、森高雅門の筆になる二村山の景観を載せ、ついで安政四年八月の植松茂岳の序文がある。刊年はその頃のものなのであらう。茂岳は云ふ

このさうし物せし清風はわが尾張國愛知郡沓掛村の人なり　そのくつかけ村は古の両村駅の跡　その西にあたりて近くふたむら山ありかかる名ある所をしらで過る旅人もあなるは　あかぬわざなりとてこの山のけしきをもうつし　古き歌どもあつめものしていにしへしのばむ人にしめさむとて　そのよしいささかはしに記してよとこふままにものしつ　歌は後撰集にはじめて見え　駅の名は延喜の兵部式　また和名類聚抄の郷名にも見えて　この尾張國にてはいと古くさて所もそことさだかに千年をへて　まぎれなきはめでたきわざなりかし

安政四年八月　　植松茂岳

茂岳の文から清風が地元の二村山の顕彰を心がけてゐたことがわかる。このやうな古い歌枕を知らずに過ぎてしまふ旅人に対して「あかぬわざなり」と思ひ「この山のけしきをもうつし　古き歌どもあつめものしていにしへしのばむ人にしめさむ」として編輯したと言ふのであつた。茂岳は尾張の国学者で、忠順も若き日に学んだ関係、清風も何かしらの関係があつたのであらう。

この古歌集の跋文に「また此頃の人々のことの葉はおひつきてゑらすべく」とあるやうに、当時の歌人に歌を乞うたやうである。それに対してどの程度の歌が集まつたかはわからないし、その現存歌人が詠んだ歌集は上梓されなかつたので詳細は不明である。その中で物集高世の家集『葎屋集』にこのやうな詞書のある歌が載る。

三河國人中野清風がこひたるによみてつかはしける　かしこの二村山の歌昔の鎌倉の道は此山をこえしよしなれば

かまくらのふる道とめていにしへのあとをぞ忍ぶふたむらの山

これなどは清風が歌を集めた証である一首である。

四、

可月堂は清風の号であるが、清風は和菓子の店を営んでゐて、その名でもあつたのではなからうか。忠順の編んだ『類題玉藻集』二編には清風の次のやうな詞書のある歌がある。

二村山の松の実をとり谷の清水をくみて　明ぼの　千代のたね　唐錦などいふ菓子をてうじて殿の御前に奉るとて

うま人の御手にふれむもかしこきや二村山の賤がすさびは

とある。これから「あけぼの」、『千代のたね』、「唐錦」などと言ふ菓子を作つてゐたことがわからう。また『類題玉藻集』初編につぎのやうな詞書のある江戸の井上文雄の歌が見える。

中野清風が家に製する菓子　から錦を
　音に聞くふたむら山のからにし
　きしく物なしと誰もめづらむ
千代のたねといふ菓子を
　このやどにまきておほする千代
　のたね植てかへらぬ人はあらじ
　な

また同じ題で岩上登波子は

もえ初める千世のたねにもしられ
けりとはにさか行君がやどとは

と詠んでゐる。隣国三河吉田の登波子は勿論ながら、江戸の井上文雄も知つてゐた菓子であるのでそれなりに著名な菓子であつたのであらう。

五、

清風が忠順と仲深い関係にゐたことは忠順が編んだ『類題玉藻集』の初編に五十首余、同二編に三十八首の清風の歌が採られてゐることからもわかる。初編には加藤清風、二編には大橋清風と言うた同名の人物の歌があり、それを区別するためにそれぞれ姓を記すなどの配慮をしてある。そのなかで忠順旧蔵の村上文庫本の初編には所々に忠順の手で訂正がなされてゐるが、「冬獣」の歌には、これが中野清風の歌であるとの「中野」の訂正がなされてゐるのも興味ぶかいものである。忠順との関係を示す歌を二編から幾つか挙げてみる。まづ忠順の五十才の賀の歌として「村上忠順五十賀読書延齢」と題して

老らくの道まどふまでのがれなむ
書の林のおくをたづねて

と言ふ歌がある。また忠順の江戸行きの折の「忠順が江戸へくだる馬のはなむけに」と題して

かにかくにとめたしものをつかへ
すと出たつけふの旅にしあらずば

とある。忠順の江戸行きは安政元年のことであつた。

また清風の妻を種子、子に政子が居たことは『類題玉藻集』初二編に二人の歌が見えてゐることからわかる。忠順が新居を建てた祝ひの歌とし「村上忠順が新室賀に栽松と言ふ事を」と題して二人の歌が載る。

あたらしきやどのさか行あらまし
はうつし植たる松ぞしるらむ　種子

うつしうゑし松のときはにさかゆ
らむこのいへつくり萬代までも　政子

とあり、松に喩へて家の栄えを寿いでゐる。これなども忠順の清風の家族に対する配慮とも考へられる。

六、

清風の周囲の事が分かる歌の幾つかを挙げてみる。清風には文久元年に京都の朝廷から山城の民の黄金を配られたことを聞いて感激して詠んだ歌がある。また「橿之本翁の三回の零祭に秋懐旧」と題して

秋毎にわたらう雁の玉づさをかけ
てまちしはむかしなりけり

と言ふ歌がある。この橿之本翁は清風の師である石川依平のことである。依平は安政六年九月四日に逝いたのでその三年祭の文久二年の歌となる。依平からの書翰を待つてゐたことを歌にしてゐるのである。依平最晩年の安政六年四月二十五日には依平の七十賀の宴が張られ、門弟に賀歌の出詠を求めたやうである。題は「寄川祝」であつた。忠順とも繋がりのあつた福田の酒井利亮のもとへ依平門の遠州吉岡の、村松弘道は書翰を送り利亮に出詠を依頼すると共に「村上中野両君もいまだ歌不参候」と利亮からの催促を依頼してゐる。（同年五月二十五日付『酒井家文書』三好町刊）また酒井家文書によれば、翌文久元年に弘道の家の、依平の追慕の会に清風は歌を送り、それとはまた別に忠順もその追慕の会を開いたことがわかる。

先にも忠順宛の依平の書翰が、清風と連名になつてゐると述べたが、また同じくこれらの弘道の利亮宛の書翰に、忠順と清風にもと別便の「村上中野両君への壱封」をはじめ度々言付けてもゐる。（以上は『酒井家文書』による）弘道の歌が忠順の『類題玉藻集』に採られてゐるのもこの関係であらう。

また「伊藤逸彦がみまかりけるころ」と題する歌もある。伊藤逸彦は、沓掛新田中島の庄屋で二村山に因み両村と号した。昌平校に学んだ儒者で、郷学を開きここに松本奎堂も学んだ。安政六年七月に逝いたのでその頃の歌である。また「両村翁一周忌」の歌などもある。先の『酒井家文書』には利亮宛のこの両村の書翰

（年不明、八月二十七日付）があり、そこでは重陽に二村山へ清風を誘ひ登る案内が書かれてゐる。同じ沓掛の人ではあるがその関係も伺はれるものである。以上極めて簡単な記述であるが、忠順の周辺にゐた人物の一人、中野清風を取り上げてみた。そこには忠順、利亮、弘道、依平と言つた人間関係が見えてくるのであつた。

本稿をなすには瀬戸市の太田正弘氏、三好町立資料館の塚本弥寿人氏の御教示を得た。

## 平成二十年度の顕彰会活動報告

事務局　酒井

○四月二十六日
・総会
・忠順ありがとう大賞表彰式
・記念講演
演題「忠明と私」
講師　古橋茂人氏
（財団法人古橋会理事長）

○七月三日
・女性部会研修会
トヨタ鞍ヶ池記念館―蒲郡市、手織場（てばたば）三河木綿体験―蒲郡プリンスホテル（昼食）―吉良町、旧糟谷邸（三河木綿の問屋であった）見学―岡崎市新堀（深見篤慶氏ゆかりの神社とお寺に寄り、深見家の墓参をした）

○九月～十二月　計四回
・四方樹大学
講師　新行紀一氏
（愛知教育大学名誉教授）
テキスト　「座右記」
「草分衣日記」
詳細は、叢書をご覧下さい。

○九月十三日～十月十三日
・「村上忠順をめぐる人々」
忠順と連月の交流を中心に
豊田市郷土資料館の企画展

○十月九日
・歴史探訪
豊田市郷土資料館見学―トヨタ鞍ヶ池記念館―刈谷城十朋亭（昼食）―刈谷下町散策―刈谷市中央図書館にて記念講演と門人会
・記念講演
演題「幕末の村上忠順」
講師　山田孝氏
（刈谷市文化財保護審議会長）
・門人会
忠順翁門人の子孫の方に集まって頂き、交流会を行った

○十一月二十三日
・忠順翁命日墓参

## 忠順ありがとう大賞

応募期間　十一月二十三日～一月三十一日
応募総数　千五百三十九首
入賞者　二十二名
選者　永井公博先生

○会長賞　金賞（小学生の部）
堤小二年　中野　大輝

**ありがとう**
**いつもわすれてしまうけど**
**つぎこそ言おう　きもちをこめて**

※つい言いそびれてしまう言葉を、今後は言おうと、自分に言い聞かせて良いですね。

○会長賞　金賞（中学生・一般の部）
前林中三年　永井　秀登

**ありがとう　うれしかったよ**
**ありがとう　そのひとことで**
**こころがはれる**

※「ありがとう」を繰り返し（リフレーン）で詠んでいて、一層こころが晴れやかになります。

会長賞金賞の二名の方の作品と永井先生の講評を紹介しました。詳しくは、別紙をご覧下さい。

## 村上忠順顕彰会 女性部研修会に参加して

平成二十年七月三日
大島町参加者四名

小雨の中、トヨタ鞍ヶ池記念館を経由して、地合が厚く丈夫な小幅白木綿で知られる三河木綿の蒲郡手織場へ到着。「綿」→種子がついている状態では「棉」と書くという説明から始まって、綿引き、機織りの体験見学は、とても興味深く、手応えがありました。

午後に立ち寄った糟谷邸では、案

棉の実を取り除く

糸を紡ぐ

機織り

内人のユーモアを取り入れたわかりやすい説明に、当時の建物（住居）の工夫された箇所につくづく感心させられました。

昼食は、天皇陛下もお泊りになられたという蒲郡プリンスホテルでのカレーランチ、とてもおいしくいただきながら、今回もまた事務局の女性陣のこまやかな女心の行届いた企画準備に感謝しました。

## 記念樹のしだれ梅

事務局　近藤　銈司

忠順翁顕彰会では、去る二月十四日刈谷市中央図書館玄関前に、しだれ梅を植樹させていただいた。

当顕彰会は、創設以来、多くの方々のお力添えを得て、本年二十周年を迎えることができた。翁の事跡調査研究や講演会、研修会等々の事業を遅々とした歩みでありながら積み重ねることができた。これも、会の趣旨に賛同していただいた多くの方々のお力添えあってのことと感謝している。

ご案内のように刈谷市中央図書館は、忠順翁ゆかりの蔵書二万五千冊近くが、宍戸俊治・藤井清七氏のご尽力で寄贈され、「村上文庫」として保管され活用に供されているゆかりの地である。

また、当顕彰会の本年度の歴史探訪は、「刈谷市下町の散策と門人会」と題して、忠順翁の仕えた刈谷藩の城下町を散策し、翁の通い慣れた下町の風を感じることができた。さらに、忠順翁には、百五十九名の門人が確認されていたが、その子息やゆかりのある方々を中央図書館にお招きし、門人会や記念講演を持つことができ、翁の御典医としての日ごろの勤めに想いを馳せることができた。

さて、記念樹として選んだしだれ梅である。翁は、梅を好かれたようで、

懐かしく梅咲く窓に筆とれば紙も硯も梅の香ぞする。

春ごとに君がなれにし梅の花この春も咲きにほふなり

のように、梅を愛でた歌を多く詠んでみえる。梅の香は、清楚で気高く高貴な香りを放ち、風雅の心を忘れなかった翁の生き様と呼応しよう。また、時代の先を洞察する眼と、早春の冷ややかさのなか百花に先駆け開花する様は、まさに翁の姿である。

刈谷市中央図書館のご厚情で、記念樹を植樹させていただいたことを感謝し、しだれ梅の弥栄を記念している。

## 編集後記

平成二十年度は、当顕彰会が、二十周年を迎えた。この記念する年に、豊田市郷土資料館では、「忠順をめぐる人々」の企画展を開催して頂いた。刈谷市中央図書館では、門人会・記念講演の開催や記念樹の植樹にご協力頂き、刈谷市との交流ができた。

また、四方樹大学に、新しく出席して下さる方が除々に増えてきた。第三回となった「忠順ありがとう大賞」には、地元以外の学校からも応募があり、嬉しく思っている。今後も、当顕彰会に参加して下さる方が、少しずつでも増えてくれることを期待している。

この会報を発行するにあたり、ご協力頂いた皆様に心より感謝している。（事務局　酒井）